

語」と一言で言っても、「日常会話言語」と「学習言語」は違うものです。日常会話においてはその時々の方にとって自然な言語を使える環境が最適なわけですが、学習言語においては、逆に「切り替えることを強いられること」は必要です。それぞれの言語で集中して学習すること、そして、二つの言語の切り替えのスイッチをしっかりと持っていることは、バイリンガルの人が学習面で安定して成長するための重要なポイントだといわれています。ちなみに、英語で行う授業と日本語で行う授業の割合は、中学生だと60%対40%くらいで日本語使用のほうが多いですが、高校生になって自分で授業選択をして自分の時間割を作るようになると、この割合は人それぞれということになります。多い人だとSISにいても英語での授業が80～90%くらいになるような授業選択をしている人もいます。

英語の授業はレベル分けしたクラスで行っています。レベルは4段階ありますが、おおよその言い方では、そのうちひとつは一般生や日本人学校出身の生徒のクラス、そして残りの3つのレベルが英語圏（やインター）からの帰国生徒のレベル、ということになります。つまり、「英語圏からの帰国生」ということで一つのレベルとして扱うのではなく、生徒一人ひとりのバックグラウンドと語学力をしっかりと確認したうえで、現地校ESLクラスにいたレベルの人、メインストリームの授業で大丈夫だった人、ネイティブ並みの英語力がある人、というような感じに分かれたクラスで英語授業を行っています。それぞれにとってピッタリなレベルと質のAuthenticな英語授業で、現地校にいた時の続きの学習をしていると感じてもらえると思います。例えばちょうどこの春学期、英語圏から帰国した7年生（中学一年）達はそれぞれのクラスで「Zlata's diary (Zlata Filipovic)」「Skellig (David Almond)」「I am the Cheese (Robert Cormier)」などの本を教材の一つとして読んでいます。中学生の間はレベル別に分かれた指定の授業を受けますが、高校生になるとそれぞれのレベルに応じたたくさんの選択授業の中から取りたい授業を選ぶことになります。ネイティブ並み英語レベルのクラスの人、9年生以降



はOISのIB Englishの授業を受講することができます。

また、アメリカ在住の方には直接関係のないお話のようですが、英語圏以外の国で現地校に行っていた人のためには、現地で学んできた言葉での学習を続けてもらうために、「中国語」「韓国朝鮮語」「フランス語」「スペイン語」「ドイツ語」という授業も用意しています。SISでの「校用語」（もちろん「公用語」をもじった言葉です）は英語と日本語の二言語ということになりますが、冒頭で書いたように、自分の心に育った言語世界を維持することは帰国生の人にとってとても大切なことと考えているためです。またこれらの言語の授業は、高校生になれば初心者でも履修することができる仕組みになっています。

アメリカから帰国した人の中にも、中学生の間に英語と日本語でバイリンガルとしての安定と自信を身につけて、高校生になって三つ目の言語を始める人は結構います。しっかりと安定したバイリンガルの人が三つ目の言語を習得するスピードの速いことには驚かされますね。

海外で身につけたAuthenticな言語力を日本でももっと伸ばす環境と語学プログラムを用意しています。一時帰国の折にはぜひ学校の見学にお越しください。お待ちしております。

千里国際学園 中等部・高等部
〒652-0032 大阪府箕面市小野原西4-4-16
電話 072-727-5070, FAX 072-727-5055
HP:www.senri.ed.jp, E-mail:admissions@senri.ed.jp

井藤 眞由美 (いとう まゆみ)

教頭

日本の大学を卒業後、大阪府立高校に10年間勤務。その後1993-1998年をシカゴとサンディエゴにて過ごす。サンディエゴでは応用言語学のM.A.を取得。3人の子供を通じて、保護者として現地保育園・幼稚園・小学校・日本語補習校を経験。帰国後は大学講師等を経て、2000年4月よりSISの英語科教員として勤務。入試や広報の仕事に関わってきたが、2009年4月より現職。



千里国際学園のこのコラムは、2004年の創刊号から続いてきました。「千里のユニークな教育は、パンフレットだけでは分からない」と、大迫校長をお願いしてのスタートでした。

千里国際学園は、この4月眞砂校長・井藤教頭を新しく迎えて、成人入式(20年)も目前です。まさに、これまでの伝統を飛躍させる新しい教育の始まりです。

その機会に、このコラムも新シリーズをスタートされることになりました。1回目は井藤先生自身の思いをこめた「千里の教育と言語」のお話でした。次回からの執筆担当の皆さんもがんばってください。

この新シリーズで、千里国際の教育のユニークさと素晴らしさを、読者の皆さんにも体験していただきたいと、私も願っています。